

資料

## 資料：「指導死を考える講演会（その3）」逐語録

Document : A Literal Record of Lecture on “SHIDO-SHI “(death of students caused by teachers’ inadequate treatments) , No.3

加藤 誠之（高知大学教育学部）<sup>1</sup>

北海道立高等学校吹奏楽部指導死事件の御遺族<sup>2</sup>

KATO Masayuki<sup>1</sup>, the bereaved family of the victim of “SHIDO-SHI” in a brass band club of a Hokkaido prefectural high school<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Education, Kochi University

### ABSTRACT

9th July 2019, we had a lecture titled “Lecture on SHIDO-SHI No.3 “ by the bereaved family of the victim of “SHIDO-SHI” in a brass band club of a Hokkaido prefectural high school, in Taiheiyo Gakuen High School (a private high school in Kochi City, Kochi Prefecture, Japan). This document is a literal record of her lecture.

## I. はじめに

「高知子どもの権利を考える会」(代表者:高知大学教育学部准教授 加藤 誠之)は、2019年7月9日(火)、北海道立高等学校吹奏楽部指導死事件の御遺族をお招きし、私立太平洋学園高等学校(高知市栄田町1-3-8)で「指導死を考える講演会(その3)」を開催した<sup>1</sup>。本稿はその逐語録である。

## II. 御遺族の講演

私は現在、東京で働いているのですが、数年前までは北海道で暮らしており、弟が亡くなる時は同じ家で過ごしていました。現在も親は北海道で、裁判を学校相手にやっている最中です。

私は2013年の3月3日に、札幌市内で都立高校に通っていた弟を指導死で亡くしました。弟の名前はユウタと言います。指導死とは、教師の指導によって肉体的、精神的に追い詰められて、生徒が自殺することを言う言葉です。先ほど紹介にあった大貫さんという方が作ってくれた言葉です<sup>2</sup>。

弟は当時高校1年生で、私は高校3年生でした。ユウタが自殺したのは、私の高校の卒業式の2日後でした。卒業式の日、帰宅してから寂しいと言っている私に、ユウタは「俺がいるじゃん」と笑って声を掛けて、食べていたお菓子を分けてくれました。このとき私が思い描いていた未来には、当たり前のようにユウタがいました。自分が年を取って死んでいくまで、私は大好きな優しい弟とずっと一緒に生きていくのだと思っていました。そのたった2日後から、私の残りの人生の全てが変わってしまいました。

ユウタとずっと仲良く生きていくという当たりの幸せはもうどこにもありません。亡くなる少し前に、私が志望校に合格したら、ユウタは自分のことのように喜んで、ハイタッチをしてくれました。私が自動車学校に通い始めると、「免許を取ったら最初に乗せてね」と楽しそうに話したりもしてくれていました。そんなユウタを思い出すたび、寂しくて苦しい気持ちになります。生きていたら新しい学校の話もしたし、ドライブにもたくさん行ったと思います。他にも楽しい思い出をたくさん作りながら、一緒に大人になっていったと思います。

私はユウタがいなくても、ユウタの生きていくはずだった未来を生きています。6年たった今でも、ユウタのことを考えない日は1日もありません。きょうだい亡くなっただけでも悲しいですが、その死が自殺であったということがとても悲しいです。遺体になって自宅に帰ってきたとき、泣きながら死んでいったんだと分かる顔をしていました。多くの人が当たり前のように暖かいベ

ッドで親切にされて死んでいくのに、私の大切な弟は死にたくなるほど悲しい思いをさせられて、たった一人で泣きながら寒くて暗い地下鉄で死んでいったということが、とても悲しいです。

また、指導死で亡くすことでの苦しみもたくさんあったように思います。大切な人が教師に、“おまえはこんな悪いことをする人間だ”というレッテルを貼られ、責められ、自分がどんな人間に仕立て上げられているのか。自分が何をしたことになっているのかも分からないまま死んでいく。大切な人の人生の最期がそのような混乱や悲しみでいっぱいになってしまったこと。一人の生徒の夢や友達や人生が奪われたのに、それが指導という言葉で正当化されること。それがとても悔しいです。

ユウタの紹介なんですけれど、ユウタは2歳上の私と2人きょうだいでした。性格は一言で言うと、とてもフレンドリーな子でした。世代も性別も問わずに、すぐに仲良くなれるようなタイプで、他の人のいいところを見つけるのが上手な子でした。ユウタの心配な面としては、人を少し信用し過ぎるところがありました。他人の優れたところを自分のことと比較して、卑屈になることなく素直にすごいと言えるユウタは、他人の嫉妬というものには少し疎かったように思います。

ユウタは小学生の頃は、野球と水泳をやっていましたが、もともと音楽が好きで、中学からは吹奏楽を始めます。ユウタはそこで出会った吹奏楽部の顧問をすごく慕っていて、家でもよく「N先生って音楽のことすごく詳しくてすごいんだよ」という話を楽しそうにしていました。先輩部員ともすぐに仲良くなって、休みの日には同学年の部員と先輩部員と一緒にカラオケに出掛けたりもしていました。亡くなった後に、後輩の保護者に教えてもらったことなのですが、ユウタは後輩にも積極的に話しかけて、部活に参加しにくくなってしまった後輩がいたときには、一緒に登校したこともあったそうです。

その際、他の部員たちから先輩に連れてきてもらったように思われぬように、自分の意思で来たと思ってもらえるように、ユウタは後輩を先に入らせて、別々に登校したように見せたりもしていたようです。ユウタはそういう優しい思いつきができる子でした。中学2年生のとき、東京で行われる予定だった全国大会に、東日本大震災があって大会が中止になってしまい、参加できなかったということがありました。落ち込む生徒たちに顧問の先生は、「さまざまな理由でやりたいことができない人もたくさんいる。だから楽器ができることに感謝しよう」と話したそうです。

ユウタはその言葉をすごく大切にしていました。中学3年生のとき、引退式を兼ねた定期演奏会が行われまし

た。そこでユウタは音楽を通して感謝を伝えたり、人に感動してもらったりできることを強く実感したようでした。高校でも吹奏楽を頑張りたかったユウタは、座って演奏する座奏と、隊列を組んで行進したりしながら演奏するマーチングの両方をやっている吹奏楽部が盛んな学校を自分で探して受験しました。初めて自分で選んだ進路に希望がいっぱいだったと思います。

高校でも全国規模の大会を目指したい。そして中学でお世話になった顧問に成長した自分の姿を見せたいという気持ちで、毎日練習に励んでいました。また中学のときは、1年生でも意見をちゃんと言うことを大切にされていました。そのため高校に入ってから、もっといい部活にするために提案も積極的に行っていました。意欲的に取り組む姿に先輩たちも認めてくれていました。ユウタからは、高校に入ってから慕っている先輩部員の話や、あと仲の良かったYくんという男子部員がいるんですけど、仲間の話をしてよく笑っていました。

楽しそうにその日の出来事を話すユウタが、たった1年もたたずに死んでしまうなんて、想像もできませんでした。入学してすぐから、いくつかマーチングの演奏会があって、家族でも見に行き、すごい華やかで素敵だねって楽しくみんなで見ていました。部活はほとんどが女子部員で、同学年の男子部員はユウタを入れて3名だけでした。ユウタの1日のスケジュールですが、吹奏楽部は文科系の部活と言われていますが、朝の始業前とあと昼休みと放課後に毎日練習がありました。

部活が休みになるのは、お盆休みの2日間と、お正月の3日間。あとはテスト前とテスト期間中だけで、ほとんど休みのない状態でした。昼休みにも練習が入ってしまうので、昼ごはんは授業の合間の10分休みに食べていました。そのためクラスメイトと過ごす時間はほとんどなかったそうです。また高校は少し家から遠いところを選んだため、バス通学をしていたのですが、部活が終わって帰ってくると、夜の9時は毎日過ぎていくような状況でした。そこからすぐに夕食を食べて、宿題をして、寝る準備をして0時頃寝ても、また次の日も朝早く6時には家を出るという生活をしていました。

ユウタが疲れてソファで眠ってしまっているときは、よく寝言でも吹奏楽の話をしていました。そんなユウタの様子を見て、ほほえましいような心配なような複雑な心境になっていました。うちは家族でよくおしゃべりするほうだったのですが、高校生になったユウタと家族が話せる時間は以前と比べてとても短くなりました。家族でお出かけをするときも、ユウタは部活を優先していました。私はそんな生活が寂しいなと感じていましたが、ユウタは自分のやりたいこと、頑張りたいことを明確に持っており、それに向かって努力している姿は立派だし、

成長しているんだなと感じて、応援したい気持ちも強かったです。

お互いに成長すると、こういう距離感になっていくものなのかなというふうにも思っていました。吹奏楽部には細かい部活の規則、部則というものがありません。この規則は代々入部のときに先輩が口頭で読み上げて、それを新入生がその場でメモを取るという方法で引き継がれていました。そのメモは、私はユウタが亡くなった後に初めて読んだのですが、項目は100個以上あり、合宿での食事、先輩の前にドレッシングを全種類並べることなど、本当に意味があるのかなと思うほど過剰な上下関係が細かく決められていたり、遠征のときのバスは1年生は移動時私語はできないし寝てもいけないというものであったり。

当たり前だと思っている人も多いかもしいんですけど、部内恋愛禁止という部活もあり、顧問はその中でも部内恋愛禁止ということと、SNS禁止というのを特に重要視して、いつも言っていたそうです。

吹奏楽部の顧問は学校に勤続18年の、教師歴は30年以上のベテランでした。ユウタは吹奏楽部の、また吹奏楽部の功績を売りにして、大学に進学する生徒も多かったため、吹奏楽部自体が学校全体での広告塔のような役割もしていました。そのため管理職ですら、ユウタの死後も顧問に何も言えない雰囲気がありました。

これからユウタが亡くなる1ヶ月くらい前から話をしようと思うんですけど、その前に登場する人物を紹介します。今話していたベテランの顧問、男性ですね。その他にユウタの自殺に関係する部員としては、一番部活で仲の良かった、本当に親友のような楽しそうに毎日話していたYくんという生徒と、あとユウタとは折り合いがなかなか合わなくて、意見がぶつかるMくん。あとは、ユウタのもと恋人のAちゃん。あと亡くなる前日の指導に2年生が4名立ち会おうと、あとは男性の担任の教諭がいます。

担任の先生は若い先生で、ユウタの表情や言動をよく観察して、声を掛けてくれていたのですが、顧問とはなかなか連携を取るのが難しかったようです。ユウタは2月と3月の2回指導を受けています。1度目の指導は、2月1日でした。秋頃からユウタが帰ってきてイライラしているのが分かる時が増えてきました。ユウタは人の悪口も言わない子だったし、滅多に不機嫌にもならないタイプだったので、珍しいなと思っていました。ある日、あまりにもイライラしている様子なので理由を聞くと、Aちゃんのことだよと怒り口調で教えてくれたことがありました。

心配だけど、放っておいてほしい気持ちも分かったので、ユウタとの距離感を考えるようになりました。また、

その時期はちょうど3年生部員が引退した時期で、1、2年生の体制に部活がなくなった頃でもありました。そして2年生が不在のとき、1年生のリーダーを任されたのがユウタでした。1年生部員から、「なんでユウタなんだ」という嫉妬もあり、ユウタの提案は受け入れないなどの嫌がらせのような扱いを受けるようになっていきます。12月頃からユウタは部活を休みがちになります。

1月26日に全員で参加予定の演奏会があったのですが、それにはユウタは参加しませんでした。参加しない理由は、自分のいないステージを見て、また部員と一緒に頑張りたいか、もう辞めてしまおうか、自分の気持ちを確かめるためでした。演奏を聞いて、ユウタはまた部活で頑張っていきたいと思いました。そして今回、観客席で演奏を聴いていた身として、できることをしようと思ひ、演奏会を聴いた感想を1年生部員に送りました。

そのメールに対して、ユウタをよく思っていなかったMくんは、ユウタのいないグループLINEでユウタが上から目線なことを言っているとして、他の1年生部員とユウタの悪口を言い始めました。グループLINEで悪口を言われていることを、ユウタは他の部員から教えてもらい、自宅ですら怒っていました。そしてその後しばらくして、Mくんからユウタへ、「てめえは1年生部員全員に嫌われている。消えるんだったら、とっとと消えろ」などと書かれた比較的長めのメールが送られてきます。

ユウタはそのメールがグループLINEで悪口を言っていたものを総括したものだと思ひ、言い返すようなメールを返信しました。そのメールの中には、「殺す」という表現も入っていました。ユウタは普段、人の愚痴も言わないような子で、気分のムラもあまりない性格だったので、私たち家族はその感情的なメールに驚きました。MくんはユウタからのそのメールをグループLINEに貼り付け、「次はこんな返事を書こうと思うけど、いいよね」などのやりとりをしていました。Mくんが送ろうとしていたメールには、「死ね」という言葉も入っていたようですが、グループLINEの中の一人が「もうやめたほうがいいよ」と言ひ、そのメールはユウタには送られることがなかったです。

Mくんは翌日、そのメールをプリントアウトして学校に提出しました。そして、「殺す」という言葉が悪いとして、ユウタのみが学校の指導対象になりました。学校に母親が呼ばれ、母親とユウタと、校長と教頭と、生徒指導主任と学年主任と、担任と顧問と副顧問がそれぞれ2、3人ずつで分かれて、入れ替わり立ち替わりで指導が行われました。顧問からは事情は一切聞かれず、「おまえのやったことは吹奏楽部の功績に、先輩にも泥を塗った」と大声で怒鳴られました。本来、学校組織で対応することは正しいことかと思うのですが、顧問はそれを吹奏楽部

の汚点だと思ったようでした。

顧問は、自分の大事な部活内で、学校組織で対応しなければいけないようなトラブルが起きたことが許せなかったようでした。後から分かったことですが、トラブルのきっかけはユウタの上から目線のメールであるとしながら、ユウタの最初のメールは十分に確認されず、顧問をはじめ担任、校長、教頭、学年主任、生徒指導主任、たくさんの教員が見てもいないユウタのメールを上から目線と評価し、ユウタが「殺す」という言葉を送ることになった背景も、部員から「とっとと消えろ」というメールを送られたユウタの気持ちも考えることはないまま、ユウタに指導と反省を課したのです。

その子の気持ちに興味があれば、文の中に何か心を読み取れる部分がないか自分で読んで探すと思ひます。それなのに見てもいないメールを同僚の一人が「上から目線なメール」と言ったのをそのまま受け入れてしまう姿勢が悲しかったです。家に帰ってきて反省文を書いているユウタに、私は「Mくんも学校もおかしくない？そんなの書く必要ないし、もう部活辞めちゃえば？」と言ひました。でもユウタは、「自分が言い過ぎたのは確かだから、辞めさせられなくて本当に良かった」と言ひ、丁寧な文字で反省文を15枚も書き、その翌日には、Mくんを含めた部員全員の前で謝罪しました。

私はそんなユウタの姿を見て、そこまでして頑張りたいことがあるなんて本当に立派だなと思ひました。部活の環境には疑問も多くありましたが、本人が頑張りたいと言ひているのだから、私がこれ以上文句を言うのはユウタに悪いかなと思ひ、ユウタが部活を続けられるように応援しようと思ひました。課されていた反省文の中には他人とのメールを違う人に見せてしまうのはいけないと思ひというMくんがしたことへの納得のいかない気持ちも少しは書かれていました。この理不尽な状況に対するユウタの小さな抵抗のように見えました。

しかしユウタが亡くなった後、教員のコメントが一つも入っていないこの反省文を読み返して、この反省文に書かれているユウタの気持ちを読んでくれた人は一人もいなかったのではないかとこの気持ちになりました。さらにユウタが亡くなった後に分かったことですが、2月1日にユウタと面談をするより前に、1月30日に顧問はユウタ以外の部員を集めて、ユウタに部活を続けさせるか、辞めさせるかのミーティングを開いていたそうです。ミーティングで1年生が意見を言うことはなかったようですが、事情をよく知らない先輩部員たちからは、「トラブルを起こしたユウタには辞めてもらいたい」という意見を言う生徒もいたようです。

しかしユウタの練習態度を評価し、「物じゃないんだから、そんな簡単に切り捨てるのは良くないよ」と言ひて

くれた先輩もいて、ユウタを残す方向になったそうです。その際、顧問は、「あいつとどう関わっていいのか分からないやつは、無理してかかわらなくてもいいから」と言ったそうです。ユウタは部活に復帰した後も、人間関係の修復に苦勞していました。部員相互の関係に問題があったからこそ、このようなトラブルに発展したはずです。なのに、ユウタの側から見た経緯や心情は先生方には一切聞いてもらえないまま、ユウタの存在を許すも許さないも、他の部員に委ねられているような雰囲気になっていたのだと思います。

ユウタは理不尽な扱いを受け入れて反省しているのに、他の部員からも教師からもそのことを認めてもらえずに、そのまま学校生活を続けていくことは簡単なことではなかったと思います。どうして自分ばかりと、出る前に泣いた日もありました。

母は、「学校も部活も辞めようか？」とユウタに聞きました。でも、ユウタは「大丈夫」と言い、通い続けました。何のフォローもしてもらえないまま、無期限のメールの禁止や、いつ終わるとも分からない人間関係の修復など、終わりの見えないものと一人で戦うことは、とても大きなストレスになっていたと思います。終わりが見えないまま毎日続くストレスは、自殺の要因にもなると思います。2月の指導からしばらく経つと、ユウタは女子部員とは距離があるけど、男子部員とは前よりも仲良くなったと話していました。

仲直りの過程で、もう男子部員の中では隠しごとはせずに仲良くしようと決めたそうです。ユウタはその状況で、部内恋愛が禁止でしたが以前 A ちゃんと付き合いっていたということを男子部員 2 名に伝えました。私はその日の夕方にユウタから、「A ちゃんのことを男子部員に話したよ」という話を聞きました。私はユウタに「隠しごとをしていたことで裏切りだと怒られなかった？」と聞きました。ユウタは、「M くんが A ちゃんのことを好きらしくて、他の人から付き合い始めたことを知られちゃう前にちゃんと言っておきたかったんだよね。2 人とも仲良かったり関係がギスギスしたりしていたのは、そういうことだったのかって納得してくれたよ」と話していました。

ユウタと A ちゃんは部内恋愛禁止というルールであったため、わざと人前では仲を悪くして見せていたらしく、そのうち A ちゃんの表裏というか本当の気持ちがユウタ自身からなくなっていったようで、A ちゃんのその態度を見て、他の女子部員も何となく素っ気なくするようなことも増えていきました。それがちょうど秋頃に 1 年生部員の関係を崩していく一つの要因になっていたようにも思います。M くんはユウタの話を聞いて、その場では納得していましたが、M くん自身、A ちゃんのことを

好きだったため、ユウタの A ちゃんのことが本当なのか確認しようとあちこちに聞いて回ってしまいます。

そして M くんは顧問にもこの話をしに行きます。その話を聞いて、顧問は、「そんなあいつの根も葉もない嘘だから気にするな。A がユウタと付き合いはずがない」と言ったそうです。しかし、A ちゃんとユウタの話を先輩部員も知っているとなり、顧問は「ユウタが根も葉もない嘘をたくさん部員に言いふらしている」と思い込んだようです。実際は、ユウタは男子部員との秘密ごととして伝えただけで、A ちゃんとの交際は事実だし、そのことを先輩部員に行き回ってしまったのは M くんでした。

しかし顧問は 3 月 2 日、先輩部員 4 名を集めた場にユウタを呼び出し、事実確認をしないまま、ユウタを一方的に責め立てました。帰宅したユウタは明らかに元気がありませんでした。そして何があったのかを次のように家族に話してくれました。

部活の後、音楽準備室に呼び出されて、そしたら顧問の先生にいきなり、「何のことだか分かるよな？」と言われて、分からないって言ったら、悪いことをした自覚もなかったのか余計怒られるかなと思って、テストを休んだことかなと予想して、「はい」と答えた。そしたら、「おまえのやっていることは名誉さ損で犯罪だ。俺の娘に同じことをされたら、おまえの家に殴り込みに行く。警察にも訴える。そういう嘘を言ったと認めるんだな」と言われて、ユウタは「前回のメールトラブルのことでもなさそうだったけど、何のことですか」とは怖くて聞けませんでした。「今後、部活を続けたいのか？」と聞かれたから、「続けたいです」って答えたら、「なら条件を出すと言われて、もう誰とも連絡取るな。しゃべるな。行事にも参加しなくていい。おまえは与えられた仕事だけやってろ」と言われて、「あとの条件は先輩部員から明日言うから、おまえはもう帰っていい」と言われて帰ってきたと話していました。先輩部員たちの前で、自分が嘘つきであると認めさせられたり、犯罪者呼ばわりされたりして、でも何のことだか分からないから反論もできなくて、そんな経験を学校で、しかも教師からさせられることがあること自体、私は衝撃的でした。顧問はこんなセリフをどんな口調で、どんな剣幕で放ったんだろうと考えますが、想像しきれません。こんな条件を受け入れて、どうやって人として存在していったらいいのだろうと考えますが、それも分かりません。

私にはあの顧問の発言からは、一緒に頑張る部活の仲間、教え子としてのいい関係を築いていこうとする姿勢は少しも感じ取ることができませんでした。仲間扱いされない、縁を切ろうとする言動のように思えます。私はユウタからその話を聞いたとき、「どんな疑いを掛けられ

ていても、突然決めつけてそんなこと言われるのはあり得ないでしょう。何があったかちゃんと確認できるまで部活に行かなくていいんじゃない？」と言いました。するとユウタは様子を変えて、突然慌てたように、「明日は絶対行くから、明日行かないと本当に辞めさせられちゃうから」と、何度も何度も言いました。

家族まで部活を取り上げるようなことを言っただけで、ユウタが安心して相談できることが、できるどころがなくなってしまうと思いましたが、それでも何度か、「でも、行かないほうがいいんじゃない？」「いや、絶対行く」という、そういうやりとりを何度も繰り返しました。さらに、これはユウタが亡くなった後に知ったことですが、3月2日に立ち会った先輩部員からも、「辞めてほしいと思っただけで」と伝えられていたそうです。また、これも後から知りましたが、続けたいというユウタの答えに対し顧問は、「3度目はないぞ。できるんだ？絶対だ？」と言い、ユウタは返答にすごく困っている様子だったそうです。

その様子を顧問は、「たぶん条件を守れる自信がなかったんでしょ」と、ユウタが亡くなった後、生徒に話していたそうです。自分がどんなに気を付けても、その努力は誰も認めてくれず、何かあればまた自分が悪いと決めつけられて叱責される。そんな状況では、どんなに頑張っても3度目は勝手に作り上げられてしまう。どこに向かって頑張ればいいのか。一度でも失敗したら、もう二度と犯罪者というレッテルからは逃れられないのか。一度悪かったと正直に認めたら、もうどんな扱いを受けても、受け入れていくしかないのか。そんな絶望と混乱で心がいっぱいになったのではないかと思います。

3月3日、ユウタが亡くなった日。この日は日曜日だったため、午前中から部活が予定されていました。家族は前日の夜からずっとユウタに部活を休むように勧めましたが、「今日休んだら本当に辞めさせられる」と焦った表情で何度も言って、結局ユウタは学校へ行きました。しかし、Mくんや部員たちに会って事情を確認することも、部活に参加することもさせてもらえないまま、地下鉄へ向かい、親友であったYくんにもメールを書いて、13時過ぎに自殺します。顧問は、朝のうちにユウタが一度は登校していたのに部活に参加できていない状況を把握していました。

しかもその日は吹雪でした。ですが、顧問は校内を探すことも、本人の所在を確かめることもしませんでした。家庭への連絡もしませんでした。それどころか、「これであいつはもう駄目だな。今後は一切関わらないこと。もうあいつのことは話題にしないで練習に集中だ」と言い、部活を始めていました。このときユウタはまだ生きていました。こんな発言をしなくて、きちんと探してい

れたら、死ぬまでに3時間以上もあったのだから、死なせずに済んだかもしれません。そんなことを思うと、本当に悔しいです。

後から学校の資料で知ったことですが、当日に会うことができたなら、再度指導を重ねる予定だったそうです。真実かどうかも確認されないまま、どうしてそこまで徹底して追い詰められなければいけないのでしょうか。吹奏楽が好きで、続けていくために、2月中の理不尽な扱いに耐えて頑張っていたユウタの何が気に入らなかったのでしょうか。またユウタは当日、本当は顧問に会っていたのではないかというふうに話す人もいました。顧問は断固会っていないと言っています。ユウタはあんなに部活を続けたくて必死に学校に行ったあの日、本当は何があつて、どんな気持ちになって、どんな顔で校舎を出て、地下鉄に向かったのでしょうか。本当のことは一生分かりません。

本当のユウタの悔しさや悲しみが分からないまま、家族は生きていかななくてはなりません。ユウタがYくん宛てた最後のメールには昨日顧問から言われた言葉や、何をしたら怒られているのか分からない混乱、犯罪者呼ばわりされたことへの理不尽などがぎっしり書かれていました。ユウタは前の日、なぜこんな扱いを受けることになったのか、Yくんに事情を確認しようと電話を掛けています。しかし、彼からメールや電話が返ってくることはありませんでした。結局ユウタは自分がなぜそのような扱いを受けるのか、誰からも教えてもらうことができませんでした。

後から分かったことですが、顧問がYくんにもユウタと連絡を取らないように何度も念押しし、Yくん自身どうしたらいいのか分からない状況になっていたそうです。

学校や顧問は何を守りたかったのでしょうか。顧問はトラブルになるくらいなら、コミュニケーションの手段なんて奪ってしまおう。トラブルになるような友達ならなくしてしまおう。そんな発想だったんだと思います。そんな顧問の勝手な対応は、一人の生徒を死に追い詰め、一人の生徒の人生を大きく変えてしまいました。学校管理職は、ユウタが亡くなる前日に顧問が何をしたらいいのか全く把握していませんでした。一連のひどいことは全て顧問の独断でされていたことでした。

学校組織で対応することで、自分が担当する部活の評価が下がると思ったのか、今度こそユウタを辞めさせるために行き過ぎた指導ができる環境を整えようとしたのかは分かりませんが、少なくとも他の教員が関わっていれば、事実確認をされずに他の生徒のいる前で犯罪者呼ばわりや嘘つき呼ばわりされることはなかったのではないかと思います。亡くなった翌日、全校保護者説明会が行われました。そこで顧問がいじめをさせていたのでは

ないかという声や、顧問の指導方法に疑問を持つ声がたくさん上がっていました。

しかし、その説明会の4日後に学校は、まだアンケートも実施していないのに、「いじめはなかった。指導は適切であった」と話すように職員会議で統一しました。学校は一人の生徒の死の真相を追求することよりも、“教師のいじめによる自殺”という情報がこれ以上流れないようにすることを優先したのだと思います。私はユウタの人生にちゃんと目を向けてほしかったです。生きていても声を聞いてもらえず、死んだ後も足を止めて向き合ってくれる人がいないなんて、ユウタの気持ちを考えると悲しいです。

また亡くなった10日後に、顧問は遺族に無断で吹奏楽部のみの保護者説明会を行いました。その説明会には管理職の立ち会いもなく、顧問の都合のいい内容のみが話されていたようです。説明会の中で顧問は、「言いふらしていることが許せなかった。そういうことをしたのか確認はしたつもりでいる。私も教育者だから、何でもかんでもいいですよということにはならない。一人のことも大事だが、もっと大事にしなきゃならないのは全体のこと。永遠にそれをやり続けたら、とんでもない社会人になって犯罪を犯すかもしれない。続けたって言ったんですよ。本来ならもう駄目ですよ。普通なら、もう学校にだっていられないですよ、そんなの。私は非常に不謹慎かもしれないけど、こういうことで生徒は成長していくのかなと思っています。こういうことは世の中にたくさんあるし、部員、あいつを除いて全員本当に被害者だったなどと思う」などと話されていました。ユウタから何も確認していないのに、重い罪を犯した生徒かのように言われていたことを後から知り、本当に悔しい思いです。

また参加した保護者からも、「犯人探しはしないほうがいい。親がちゃんとフォローしてあげていないから、こんなことになる。学校を責めてもどうしようもない。残された子たちをどうするかが心配」などの声が上がっていたそうです。説明会は誰のためのものなのでしょう。ユウタの人生に何があったのか、真実をきちんと知りたいと思ってくれた人はどれくらいいたのでしょうか。私には生き残った者の言い訳の場としか感じられませんでした。ユウタが亡くなった日、家に来た顧問に向かって私は、「なんでそんなことを言ったんですか。どうしてユウタに個別でちゃんと確認してくれなかったんですか」と前日の言動を問いました。

それに対して顧問は、「そんなつもりで言ったんじゃないから」と悪びれた様子もなく、逆に怒り返すように言ってきました。私はあのととき、人生で初めて怒りで手が震えました。その後もしばらくは顧問が校長たちと一緒に訪問には来ていました。しかし反省した様子も

なく、言い訳ばかりしてくるため、私たちはつらくなり、一時的に顧問の訪問をお断りしていました。ユウタが亡くなった年の11月、再び顧問に話を聞きたい状況になったので、再度面談を行いました。たった8カ月前のことなのに、「資料がないと覚えていない。自殺があったせいで、今年は部員が全然入部してこなくて、暗黒時代ですよ。あいつの名前は部活では一切出していません」などと言われました。

一人の人生にかかわる大事なことを簡単に忘れてたり、自殺した生徒を迷惑と言ったり、生徒をこんなふうにし扱えない大人に、ユウタの人生が奪われたことが悔しかったです。再び話を聞きたい気持ちになれず、やっとまた面談できそうになったのは1年後の2014年の11月でした。顧問との面談を依頼すると、今度は「顧問の私見を問うことになるため」という理由で断られました。結局、一度も誠意ある面談はされることもなく、今は顧問に会うことすらできない状況でいます。

ユウタが亡くなってしばらくして、校長から「結果は全て家族に渡すので、アンケートをやらせてもらえませんか？」と言われ、私たちは「ぜひお願いします」と言いました。しかし、その後はいくら待っても「精査中」と言われ続け、最終的には「個人情報開示請求をしてもらわないと渡せない。開示請求をしても黒塗りばかりになると思うので、渡すほうもつらい」などと言われました。

どんな情報でも知りたい私たちは、開示請求をすることにしました。すると、アンケートを要約したという文章が出てきました。そこにはいじめがあったことや、顧問がいじめをさせていたことなどが書かれていました。私たちはきちんとした原本のコピーを見たいと思い、再度開示請求をしました。すると、遺族に知らされないまま、ユウタの自殺からたった1年でアンケートが破棄されていたことを知りました。しかし、吹奏楽部員が書いたアンケートだけはPDFにして残されており、それだけでも見せてほしいと交渉して、2017年の11月ようやく遺族がこれを見ることができました。

ユウタの死から4年半もかけて、ようやく手にしたアンケートには、部員を失った生徒たちの悲しみや混乱、後悔、ユウタはどんな気持ちだったんだろうと考えたり、ユウタに何があったのか知りたい気持ちなどたくさん書かれていました。学校が事実をあいまいにして、きちんと調査しないことで、関係ないことまで責任を感じてしまっている生徒さんもいました。そういうことがアンケートにも書かれていたし、うちに来てくれた生徒さんたちも同じようなことを話す子が何人もいました。

真実を知らないままにしていることが、生徒さんたちのためになっているようには思えませんでした。アンケートは、いいことも悪いこともどんなことも、その子なりに

ユウタのことを考えて書いてくれたものです。私はアンケートの実物を見て、その内容や文章の長さを問わず、そうやってユウタのことを考えてくれていた時間を感じたかったです。なのに、学校はたった1年でアンケートを破棄して、ユウタが生きていたことを死んでしまった後でさえ否定されているような気持ちになりました。

学校は遺族が期待しているような内容は書かれていませんと言っていました。私たちが望んでいたことは、学校が思っているようなことではないです。私たちは家でのユウタの様子しか知りません。しかも高校生になってからは、ほとんどの時間が学校であったため、ユウタが学校でどんな感じだったのか、それを素直に知りたかっただけです。しかし学校はアンケートを出すことで、責任追及されてしまうと思ったのだと思います。学校と遺族の気持ちのズレで、先回りして隠蔽されてしまうことは、本当に残念だと思いました。

事後対応をきちんとしてもらえないことで、私たちは今もまだつらかった時期のことばかり考えさせられます。そうやって過ごしていくうちに、ユウタと過ごした楽しかった思い出がだんだんと思い出せなくなってきてしまう気がして、つらいです。私の家族はもともと仲が良かったので、よくリビングに集まってテレビを観たり、たわいのない話をしたりして笑っていました。ユウタが亡くなった今、家のリビングにはユウタの仏壇が置かれています。

それまで読んだこともなかったような難しい資料もたくさん置かれています。ユウタが亡くなってからは、それまでどんな話で盛り上がってきたのか忘れてしまうほど、つらい話ばかりです。私はユウタを奪われただけでなく、家族全部を壊されたような気持ちでいます。よく「死ぬくらいなら学校なんて辞めていい」という意見があります。私はその意見は違うと思います。ユウタは亡くなる前日に何があったのか、家族に話してくれました。現実を口に出すことがどれほど苦しかったかと思います。

話を聞いた私は、「なぜそんなことを言われなきゃいけないんだ」と怒りました。そして「明日行く必要なんてないよ」と言いました。でもユウタはすごく焦った表情で、「明日休んだら辞めさせられる」と何度も言いました。事情も分からないままに責め立てられて、そのまま話が進んでいくのは絶対におかしいと思うので、「明日は行く必要はない」とは言えただけ、ユウタにとって部活がどれほど大事なものは知っていたから、「部活なんて辞めてしまえ」とは言えませんでした。辞めようって言っちゃったら、そこで頑張りたいユウタの気持ちはどうなってしまうんだろうと思ったからです。

生きがいや大切な友達を失いたくなくて必死なユウタの叫びに、辞めてしまえばいいんじゃないかということ

は言えませんでした。思い込みで責め立てた顧問が悪いのに、どうしてユウタが今ある幸せを全て失わなければいけないのか納得できませんでした。ユウタにとって学校は顧問のせいで死にほどつらいことが起こっている場所でしたが、ほんの少しでもかけがえのない幸せもある場所だったんだと思います。ユウタが最後まで連絡を待っていた親友のYさんと、ユウタが亡くなって2年後に初めて会うことができたとき、この子との友情は間違いなくかけがえのない幸せだったんだろうなと思うことができました。

家族はこんな宝物まで奪う判断をしないとイケないのでしょうか。世界は広いし、これからいろんな幸せにも気付ける年齢だったと思います。だけどあのとき確かにあったはずの幸せも、死ぬほどの苦しみも、全てなかったことにはできないと思います。あの学校を無理やりでも辞めさせて、病院に連れていっていったら、死なせずに済んだかもしれません。でもたとえ生き延びたとしても、あの日顧問と部員にいらぬ人間として扱われたことを、毎日毎日考えて生きていけなくちゃいけないんじゃないかと思います。

明るくて人と関わることが大好きだったユウタは、3月2日の時点で既に殺されていたんだと思います。そんな状況の中で、この先の長い人生を生きていかなければいけないということを考えても、それでも「行かなきゃ解決する」と本当に言えるのでしょうか。学校に行くか辞めるかではなく、学校でそこまで心が傷つけられてしまうことがあるという現実をもっと考えていただきたいです。また部活の保護者たちが、「親がきちんとフォローしてあげないから」などと言っていました。私の母は学校でいろんな気持ちになって帰ってくるユウタに、いろんなことを迷いながら丁寧に関わっていたと思います。

私はそれを家でずっと見てきました。だから、そんなふうに言われていると知ったとき、私はすごく腹が立ちましたし、悔しかったです。きっとユウタも同じ思いだと思います。自分を追い詰めた教師は無理に美化されて、自分を尊重して大事に関わってくれていた母が非難されるなんて現実に、死後もなおショックを受けていることと思います。ユウタは教師によって孤立させられていきましたが、家族はその悩みを聞くことはできませんでした。でも学校での所属の欲求を家族が満たすことはできないように思います。

家とは違う社会に自分の存在価値を認めてもらいたいと思うのは、思春期の子なら当たり前を感じるのだと思います。それを子ども相手に何十年も仕事をしている教師が奪ったのに、なぜ子どもが死んだら親の責任になるのでしょうか。その保護者たちは自分さえしっかり子育てをしていけば、うちの子は死なずに済むと思って安



心したいのかもしれませんが、親がその子をどれだけ大切にしても救えないことが学校では起きているのだと思います。

一緒に育ってきた身として、私にもっとできることがあったんじゃないかと自分を責める気持ちは今もずっとあります。でもユウタの死ぬほどの苦しみは、家族が優しくしてあげたぐらいで解決できるようなものではなかったんだと思います。毎日一緒にいた家族なのに、私にできることは本当にあれだけだったのかと、あの日からずっと考えていますが、あの日これをしてあげれば救えたなというものは一つも見つけられていません。自分が責任逃れをしたいとか、被害者ぶりたいとかではなく、家族だけでは救えないほど、それだけひどいことを教師にされたんだと思っています。

被害にあってからでは救う方法が思いつきませんが、あのような顧問を出さない、あるいはあのような顧問に暴走させない環境をつくることができれば、ユウタのような悲しい死に方をする生徒は出ないはずで、生徒を自殺に追い込むような言動が指導のはずがありません。指導は子どもの成長を助けるものであるはずで、いろんな境遇で育つ今の時代の子どもに、平等な教育が提供できるプロであってほしいなと思います。

音楽大学出身で、過去にいたかのバックバンドでドラムをやっていたこともあったそうです。プロを目指していたが、食べていけないで教師になったと生徒に卒業式のときに配る先生の自己紹介みたいなやつに書いてました。同僚の先生たちからは、生徒をビビらせるような物言いをして、生徒は反論できないような力関係でしたという情報がありました。生徒からも、あの先生どんな人だったのと聞くと、態度悪い先生ですよ。職員室にも居場所がなかったらしいですよというふうに言われていました。

最後に、顧問の耳にも心にも届かないと思うんですけど、私の思いを顧問宛ての手紙として書いたものがあ

るので、それを読ませていただいて、発表を終わろうと思います。

顧問の先生へ。あなたが事実かも分からないことで犯罪者扱いしてもいいような、そんな価値しかないと思ったその少年は、私にとってかけがえのないたった一人の弟でした。そんな大切な弟は、人生で一番悲しい思いをさせられて、たった一人で泣きながら死んでいきました。あなたが死んでも迷惑としか思わなかったその少年が死んで、たくさんの人がその少年の家に来て泣きました。

あなたが部活から排除したかったその少年とずっと生きてきたかった人がいることを、あの日のあなたは想像できていましたか。きっと今も想像できていないのでしょう。あなたは友人とトラブルを起こすなら、友人なんて取り上げてしまえばいいと思ったのですよね。だから連絡を取ることも話すことも禁止したのですよね。でも、その少年が死んで、多くの人が悲しんだように、みんないろんな人とのつながりがあるからこそ生きていけるんだと思います。どうか大人の仕事の楽さのために、好き嫌いや思い込みで子どもを犯罪者扱いしたり、責め立てたりするようなひどいことはもうやめてください。

あなたにとってはどうでもいい子で、何を言ってもあなたの心は何とも思わなかったとしても、どんな子もみんな誰かのかけがえのない大切な人です。あなたに不誠実な対応をされるたび、私は自分の苦しさや弟への申し訳なさで心がえぐられるような感覚になります。直接ぶつけられたたくさんの攻撃的な言動はもちろんですが、裁判をしている今もなお、関係のないような顔で音楽活動や教師を続けていることにも傷つきます。あなたが不誠実な言い訳を続ける限り、傷つき続ける人がいることに気付いてください。

その少年はいろんな人とつながって生きていました。だから、死んで終わりだとは絶対に思わないでください。御静聴ありがとうございました。

## 注

- 1 「高知子どもの権利を考える会」では、2016年7月12日（火）に大貫隆志さん（「指導死」親の会共同代表）をお招きし、「指導死を考える講演会」を開催した（加藤誠之・大貫隆志、2017、「資料：『指導死を考える講演会』逐語録」（『高知大学教育学部研究報告』第77号、pp.9～19）参照）。また、2018年7月11日（火）には安達 和美さん（学校事件・事故を語る会九州呼びかけ人、「指導死」親の会共同代表）をお招きし、「指導死を考える講演会（その2）」を開催した（加藤誠之・安達和美、2019、「資料：『指導死を考える講演会（その2）逐語録』（『高知大学教育学部研究報告』第79号、pp.1～16）参照）。そのため、今回の講演は「指導死を考える講演会（その3）」と題している。
- 2 「指導死」という言葉は、学校の指導を契機とする自殺で次男を失った大貫隆志さんによって「指導を受けた結果としての自殺」を指す語として考案された（加藤誠之・大貫隆志、前掲逐語録、pp.10～12参照）。

